

## サラリーマンの生きがいの有無の規定因の検討

西村 純一

### Investigation of Determinants of the Feelings of Loss of Purpose in the life of Japanese Salaried workers

Junichi NISHIMURA

#### 要約

本研究では、日本のサラリーマンの生きがいの有無に関する意識やそれを規定する要因を検討するために、財団法人シニアプラン開発機構が、2001年に、35歳から74歳の厚生年金基金の加入者4505人を対象に実施した生きがいに関する郵送調査のデータを分析した。西村(2005a)が同データから抽出した生きがいに関する2つの尺度、ならびに西村(2005b)が同データから抽出した生きがい対象に関する2つの尺度が分析に利用された。

これらの4つの尺度と生きがいの有無に関する意識との関連を分析した結果、次のことが示された。1)「前は生きがいがあったが、今はない」という人は比較的生活安定感を求める傾向が強い。2)「現在、生きがいを持っている」人は人間的成長感をもとめる傾向が強く、「生きがいを持っているか、いないかわからない」という人は精神的安定感を求める傾向が強い。3)「現在、生きがいを持っている」人や「生きがいを持っているか、いないかわからない」人は生きがいの対象として社会的責任のある生活を選択する傾向が強いのに対して、「前は生きがいがあったが、今はない」という人は気ままな生活を生きがいの対象とする傾向がある。4)「生きがいを持っているか、いないかわからない」という人や「現在、生きがいを持っていない」人は内面的充実を求めているのに対して、「現在、生きがいを持っている」人や「前は生きがいがあったが、今はない」という人は心身の健康づくりを選択する傾向がある。

また、生きがいの有無の規定因を分析した結果、「いつも目標に向かって突き進む」「自分には他人にない優れたところがある」、「どんなところでも結構楽しみを見出す」、「夫婦の対話」、「現在の仕事の満足度」、「本人の年齢」などの変数の影響が見出された。なかでも、生きがいを持つ上で、達成動機や仕事の満足度、夫婦の対話の重要性が示唆された。

**キーワード：**生きがいの有無、日本のサラリーマン、規定因

わが国では1998年以降、自殺が急増した。また、その多くが中高年者に集中し、とくに団塊の世代の自殺率が急増している。バブル崩壊後の長引く不況の中で、急速に強まるリストラ圧力や中間管理職をなくす組織改革、産業構造の急激な変化などがサラリーマンのメンタルヘルスを蝕む要因になっているとみられる。そうした厳しい環境下でサラリーマンが明日に向かって生きていく上で、彼らの生きがいを持つ要因を探ることが重要

になっている。

日本人の生きがいについては、神谷(1966)の「生きがいについて」、小林(1989)の「生きがいとは何か」など優れた論考があるが、生きがいの程度を測定するための実証的研究は意外と乏しい。生きがいに相当する尺度を構成するために、欧米の主観的幸福感の尺度(Neugarten, B. L., Havighurst, R. J., & Tobin, S. S., 1961; Lawton, M. P., 1975; Larson, R., 1978; 古谷野, 2003)を翻案する試みはいくつかあった(杉山・他, 1981; 古谷野, 1981)。しかし、欧米流の主観的幸福感

あまりに定量的に単純化されていて、「生きがい」に含まれる日本人特有の感情の質的違いを十分にとらえているとは言い難い。また、幸福な老いの結果を測定しているに過ぎず、そのプロセスを無視しているということで、欧米でも最近、批判されるようになってきている(東, 1999)。

それゆえ、日本人の生きがいの程度を測定するためには欧米流の主観的幸福感ではなく、我々の日常生活の中から形成された「生きがい」の感じ方の程度を尺度として抽出し、そうした生きがい尺度を利用してその規定要因を探るアプローチが必要であると考えられる。

そのような観点から、筆者は、財団法人シニアプラン開発機構のサラリーマンの生きがい調査のデータを用いて、サラリーマンの生きがいや生きがい対象の構造や年齢差、性差について検討を重ねてきた(財団法人シニアプラン開発機構, 1992; 1993a; 1993b; 1997; 2002; 2003; 西村, 2005a; 2005b)。

西村(2005a)は、日本のサラリーマンの生きがいの背景には、「生活充実感对生活安定感」、「精神的安定対人間的成長」という2つのアンビバレントな次元からなる構造が存在することを示している。すなわち、生活充実感の方向の生きがいを得ようとする和生活安定感の方向の生きがいの獲得が難しくなり、その逆の傾向もある。また、精神的安定感の方向の生きがいを得ようとする和人間的成長の方向の生きがいの獲得が難しくなり、その逆の傾向もある。そして、男女とも年齢が上がるとともに、生きがいは、生活充実感から生活安定感へ、精神的安定感から人間的成長へそれぞれシフトする傾向が示された。

また、西村(2005b)は、日本のサラリーマンの生きがい対象の背景には、「気ままな生活対社会的責任のある生活」、「心身の健康づくり対内面的

充実」という2つのアンビバレントな次元からなる構造が存在することを示している。すなわち、気ままな生活の方向の生きがい対象を得ようとする社会的責任のある生活の方向の生きがい対象の獲得が難しくなり、その逆の傾向もある。また、心身の健康づくりの方向の生きがい対象を得ようとする内面的充実の方向の生きがい対象の獲得が難しくなり、その逆の傾向もある。そして、男女とも年齢が上がるとともに、生きがいは、社会的責任のある生活から気ままな生活へ、内面的充実から心身の健康づくりへそれぞれシフトする傾向が示された。

そこで、本研究では、財団法人シニアプラン研究機構が実施したサラリーマンの生きがい調査のデータを使い、生きがいや生きがい対象の構造が、「現在、生きがいをもっている」、「現在、生きがいをもっていない」、「前は生きがいをもっていたがいまはもっていない」、「生きがいをもっているのか、いないのか自分でもわからない」などの生きがいの有無に関する意識とどのように関連しているか検討する。また、こうした生きがいに関する意識を「現在、生きがいをもっている」という肯定的意識と「現在、生きがいをもっていない」、「前は生きがいをもっていたがいまはもっていない」、「生きがいをもっているのか、いないのか自分でもわからない」などの否定的意識に分け、その違いを規定する要因を判別分析によって検討することとしたい。

## 方法

調査方法と分析対象 全国の厚生年金基金の加入者・受給者。対象者の年齢を35～44歳、45～54歳、55～64歳、65～74歳の4層に分け、各層1,100人強、計4,505人を対象とした。性別構成は厚生年金基金加入者・受給者の性別構成に準じ

て、各年齢層とも男性3：女性1の比率とした。なお、男性の59.9%、女性の63.1%が現役で、男性の40.1%、女性の36.0%が定年を経験していた。また、年齢区分別の現役率は35～44歳で98.8%、45～54歳で97.3%、55～64歳で51.6%、65～74歳で4.4%であった。企業の業態や設立形態など、基金の構成を反映させて175基金を選定した。平成13年10月から12月にかけて郵送調査を実施した。有効回収数は3,189件、有効回収率は70.8%。

**分析内容** 本研究では、財団法人シニアプラン開発機構が平成13年に実施した「サラリーマンの生きがい調査」のデータを分析する。調査内容の詳細については、本調査の報告書（シニアプラン開発機構、2002）を参照されたい。

**分析の方法** 生きがいの構造と生きがいの有無との関連の分析：生きがいや生きがい対象の構造が、生きがいの有無に関する意識とどのように関連しているかについては、生きがいの有無の質問への回答により「現在、生きがいをもっている」群（現在肯定群）、「現在、生きがいをもっていない」群（現在否定群）、「前は生きがいをもっていたが、現在は生きがいをもっていない」群（過去肯定・現在否定群）、「生きがいをもっているのか、いないのか自分でもわからない」群（現在不明群）に分け、西村（2005a）により抽出された生活充実感对生活安定感の次元の尺度得点と精神的安定対人間的成長の次元の尺度得点のグループ間比較を一元配置分散分析によって行う。同様に、西村（2005b）により抽出された気ままな生活対社会的責任のある生活の次元の尺度得点と内面的充実対心身の健康づくりの次元の尺度得点のグループ間比較を一元配置分散分析によって行う。

生きがいの有無の規定因の分析：生きがいの有無に関する回答を、現在肯定群の肯定的意識と現

在否定群や過去肯定・現在否定群、現在不明群などを合併した非肯定的意識に大きく2つに分け、その説明変数として、近隣とのつきあい度、10種類の地域で所属しているグループ・団体、12種類の生活満足度、自由時間度、14種類の自由時間の活動、13種類の行動特性、9種類のつきあっている友人・仲間、21種類の夫婦関係、13種類の職業意識、7種類の職業満足度、性別、年齢、最終学歴、未既婚、住宅ローンの有無、健康状態、13種類の過去5年間のライフイベント、世帯年収、収入の余裕、暮し向き、などを投入し、ステップワイズ法による判別分析を行った。投入した変数の具体的内容は、シニアプラン開発機構（2002）を参照されたい。

## 結果

生きがいの構造と生きがいの有無との関連の分析結果：図1から図4は、生きがいの有無に関する4つの群、すなわち、現在肯定群（現在、生きがいをもっている群）、現在否定群（現在、生きがいをもっていない群）、過去肯定・現在否定群（前は生きがいをもっていたが、現在は生きがいをもっていない群）、現在不明群（生きがいをもっているのか、いないのか自分でもわからない群）に分けて、生きがいや生きがい対象を構成する4つの次元の尺度得点の平均を比較したものである。

図1によると、過去肯定・現在否定群が他の群に比して、生活安定感の方向の生きがいが強く、生活充実感の方向の生きがいが弱い傾向があることが示された。とりわけ、現在否定群との差は大きい。一元配置分散分析の結果、これらの群の差は5%水準で有意であったが（ $F(3,3132) = 2.912, p < 0.05$ ）、Scheffeの方法で多重比較した結果によると、過去肯定・現在否定群と現在否定群との差

はほぼ5%で、5%をきるまでには至らなかった。

図2によると、現在肯定群は人間的成長の方向での生きがいが高く、次いで過去肯定・現在否定群、現在否定群、現在不明群の順になった。逆に精神的安定の方向の生きがいからみると現在不明群がもっとも強く、まったく逆の順序を示している。これらの群間の差は0.1%水準で有意であった ( $F(3,3132)=7.821, p<0.001$ )。また、多重比較の結果、現在肯定群と現在不明群との差は0.1%水準で有意であった。

図3によると、現在肯定群や現在不明群は社会的責任のある生活の方向で生きがい対象を選択する傾向が強いのにに対して、過去肯定・現在否定群は気ままな生活の方向で生きがい対象を選択する傾向があり、対照的である。これらの群間の差は0.1%水準で有意であった ( $F(3,3132)=14.408, p<0.001$ )。また、多重比較の結果、現在肯定群と過去肯定・現在否定群との差は0.1%水準、現在不明群と過去肯定・現在否定群との差は1%水準で有意であった。

図4によると、現在不明群や現在否定群は内面的充実の方向で生きがい対象を選択する傾向が強いのにに対して、現在肯定群や過去肯定・現在否定群は心身の健康づくりの方向で生きがい対象を選択する傾向があり、対照的である。これらの群間の差は0.1%水準で有意であった ( $F(3,3132)=14.852, p<0.001$ )。また、多重比較の結果、現在否定群と現在肯定群とは0.1%水準、現在否定群と過去肯定・現在否定群との差は5%水準、現在不明群と現在肯定群との差は0.1%水準、現在不明群と過去肯定・現在否定群との差は5%水準で有意であった。

生きがいの有無の規定因の分析結果：判別分析の結果、固有値は0.302、正準相関は0.482であった。標準化された正準判別関数係数を表1に示し

た。また、表2は判別分析の判別率を示したものである。判別変数による肯定的意識「現在、生きがいをもっている」人の判別率の中率は90.2%であったが、非肯定的意識「それ以外の回答」の判別率の中率は、41.2%と低く、全体としての判別率の中率は74%であった。

なお、表3は年齢区分別にみた生きがいの有無に対する回答の構成比を示したものである。それによると、現在不明群や現在否定群は年齢の低い人が多く、過去肯定・現在否定群や現在肯定群には年齢の高い人が多い傾向がある。

### 考察

生きがいの有無に対する回答で、現在肯定群、現在否定群、過去肯定・現在否定群、現在不明群に分けて、生きがいや生きがい対象を構成する4つの次元の尺度得点の平均を比較した結果、興味深い結果が得られた。

まず、生活安定感对生活充実感の尺度の分析の結果、過去肯定・現在否定群が他の群に比して、生活安定感の方向の生きがいが高く、他の群は生活充実感の方向の生きがいが高い傾向があることが示された。西村(2005a)によると、男女とも年齢が高くなるにつれて、生活充実感から生活安定感へシフトする傾向が示されている。そのことから考えると、過去肯定・現在否定群には定年後の年齢の高い人が多く(表3)、生活充実感よりも生活安定感の方向で生きがいを感じる傾向が強いのではないかと推測される。逆に、現在否定群は定年前の年齢の低い人が多く(表3)、生活安定よりも生活充実感を生きがいと感じる傾向があると推測される。なお、現在肯定群や現在不明群は平均がゼロに近く、生活充実感と生活安定感との間でアンビバレントな状況にあると推測される。

精神的安定対人間的成長の尺度の分析の結果、現在肯定群は人間的成長の方向での生きがいが高

サラリーマンの生きがいの有無の規定因の検討

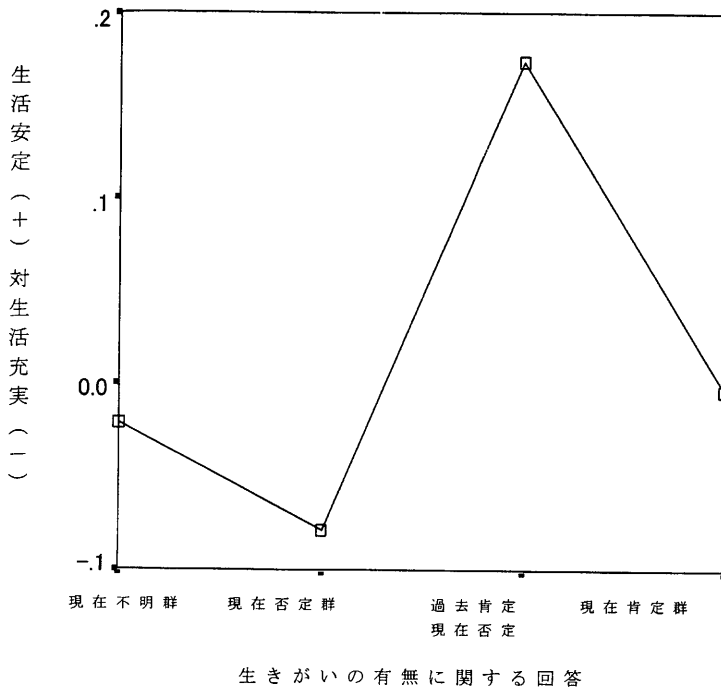


図1 生きがいの有無に関する4つの群別にみた生活充実感対生活安定感尺度の平均

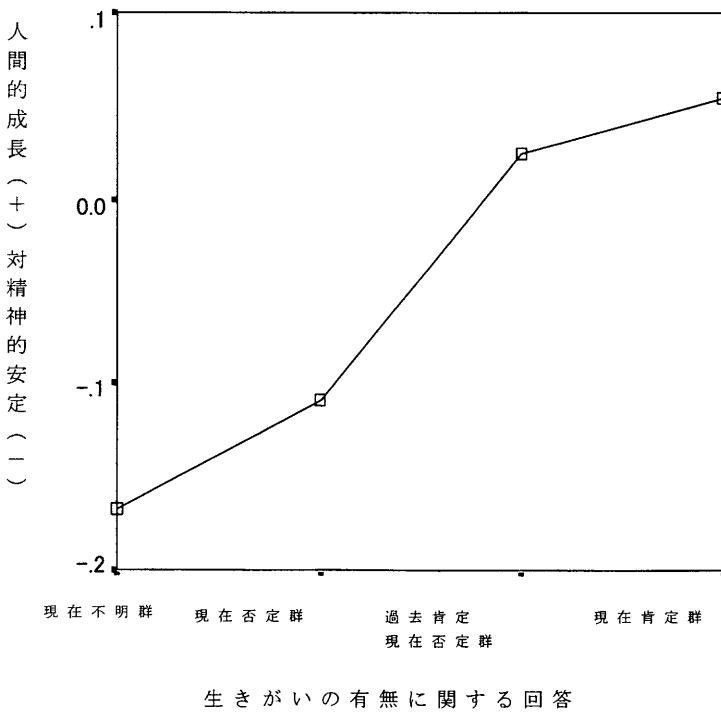


図2 生きがいの有無に関する4つの群別にみた精神的安定対人間的成長尺度の平均

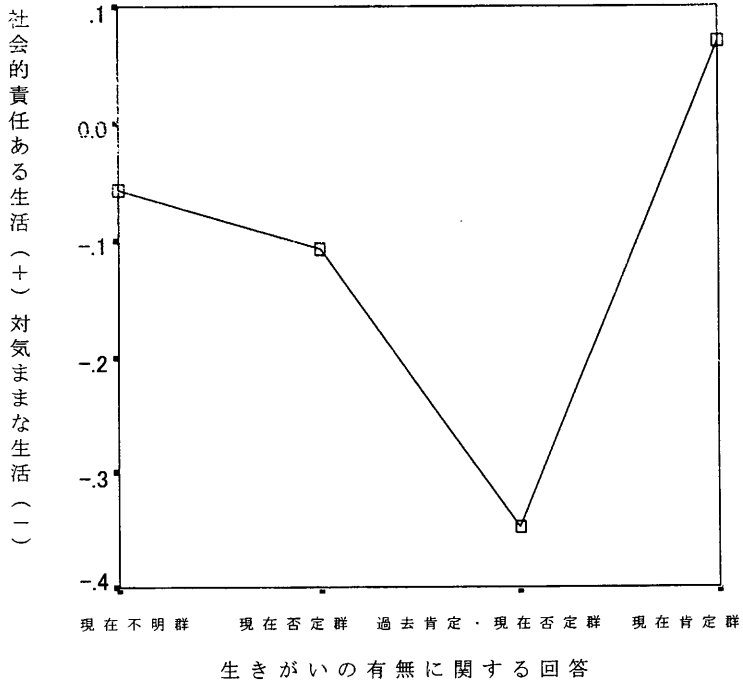


図3 生きがいの有無に関する4つの群別にみた気ままな生活対社会的責任尺度の平均

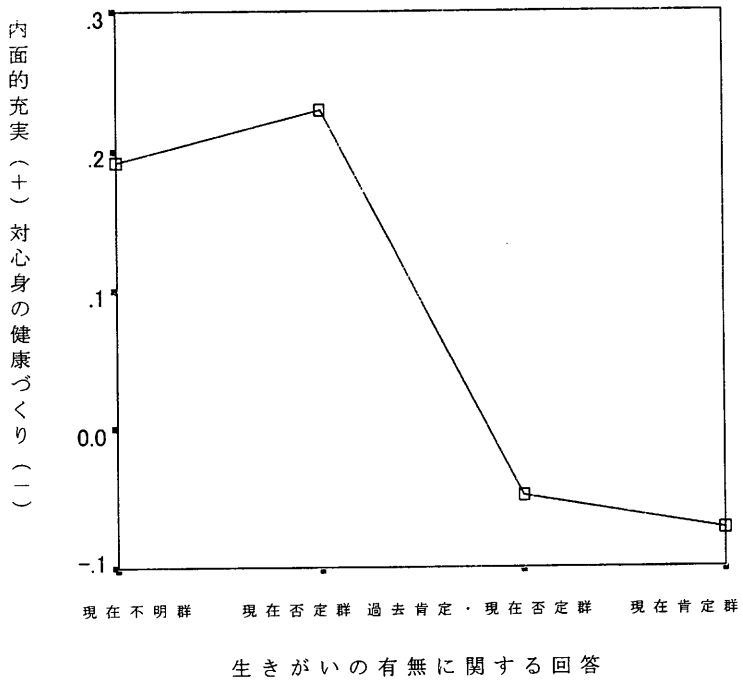


図4 生きがいの有無に関する4つの群別にみた心身の健康づくり对内面的充実尺度の平均

サラリーマンの生きがいの有無の規定因の検討

表1 標準化された正準判別関数係数

いつも目標に向かって突き進む	0.411
自分には他人にない優れたところがある	0.277
どんなところでも結構楽しみを見出す	0.285
夫婦の対話がある	0.351
現在の仕事の内容の満足度	0.382
本人年齢	0.257

表2 判別分析による判別率の結果

元のデータ	判別結果		合計
	生きがいの肯定的意識	生きがいの非肯定的意識	
生きがいの肯定的意識	1,934 (90.2%)	211 (9.8%)	2,145 (100.0%)
生きがいの非肯定的意識	620 (58.8%)	435 (41.2%)	1,055 (100.0%)

表3 年齢区別にみた生きがいの有無に対する回答の構成比

	年齢区分				全体
	35-44歳	45-54歳	55-64歳	65-74歳	
現在不明群	24.8%	20.9%	13.9%	6.1%	16.0%
現在否定群	14.4%	12.1%	5.7%	2.9%	8.5%
過去肯定・ 現在否定群	4.5%	7.2%	8.0%	8.4%	7.1%
現在肯定群	56.3%	59.8%	72.4%	82.6%	68.4%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

いのに対して、現在不明群は精神的安定の方向での生きがい強いことが示された。西村(2005a)によると、男女とも年齢が高くなるにつれて、精神的安定感から人間的成長感へシフトする傾向が示されている。そのことから考えると、現在肯定群には定年後の年齢の高い人が多く(表3)、精神的安定感よりも人間的成長感の方向で生きがいを感じる傾向が強いのではないかと推測される。

気ままな生活対社会的責任のある生活の尺度の分析の結果、現在肯定群は社会的責任のある生活の方向で生きがい対象を選択する傾向が強いのにに対して、過去肯定・現在否定群は気ままな生活の方向で生きがい対象を選択する傾向があり、対照的である。西村(2005b)によると、年齢があがるとともに、社会的責任のある生活から気ままな生活にシフトしていく傾向が示された。そのことからすると、現在肯定群も過去肯定・現在否定群も年齢が高くなるにつれて増えているので(表3)、いずれも気ままな生活の方向に向かうと予想されたが、現在肯定群は予想に反して社会的責任のある生活方向で生きがい対象を選択している傾向がある。このことは、現在肯定群は、定年以後の年齢の高い人たちも、依然として社会的責任の高い生活に生きがいを感じている人が多いことを示しており、彼らをただ引退させるのではなく、なんらかのかたちで社会的責任をもつ方向で対応策を考える必要があることを示唆している。また、本来、社会的責任世代とみられる若い人の多い現在否定群や現在不明群がややマイナス傾向と気楽な方向に傾いており、この点に対する対応も重要になっていると考えられる。

心身の健康づくり对内面的充実の尺度の分析の結果、現在不明群や現在否定群は内面的充実の方向で生きがい対象を選択する傾向が強いのにに対して、現在肯定群や過去肯定・現在否定群は心身の

健康づくりの方向で生きがい対象を選択する傾向があり、対照的である。これは、西村(2005a)によると、年齢が高くなるにつれて内面的充実から心身の健康づくりの方向へシフトする傾向のあることが示されているが、現在不明群や現在否定群は若い人が多く、過去肯定・現在否定群や現在肯定群は年齢の高い人が多いため、そうした年齢の影響が強く出ているのではないかと推測される。

他方、判別分析の結果によると、もっとも関連の強い判別変数は、「いつも目標に向かって突き進む」という達成動機にかかわるパーソナリティ変数であった。そのほかにも、「自分には他人にない優れたところがある」という自尊心に関する変数、「どんなところでも結構楽しみを見出す」という楽天的性格に関する変数などパーソナリティ関連の変数のウェイトが高い。したがって、ある意味で、生きがいを持っているか、いないかという感覚はかなりパーソナリティに関連しているといえよう。

しかし、パーソナリティでそのすべてが決まるわけではなく、現在の職業満足度や夫婦との対話、年齢の影響がうかがわれた。生きがいの場の分析で示されたように、日本のサラリーマンの場合には、仕事・会社を通じていろいろな種類の生きがい要素を獲得しているとみられる。そうした意味で、サラリーマンにとっては、とりわけ仕事の内容の満足度の影響が生きがいの獲得に大きな影響をもつと予想される。また、サラリーマンが、生きがいを感じ、生きがい喪失を予防する上で、夫婦の対話がきわめて重要であることが示唆された。年齢の影響は、生きがいを感じられないとする回答が、サラリーマンOBよりも現役のサラリーマンに多いという現状を物語るものである。この原因については、本分析からうかがうことはできないが、現在の組織環境や雇用環境のストレスが影



響していると推察される。

なお、本研究で対象としたサラリーマンは、厚生年金基金加入者・受給者であり、日本の労働者全体からみると、企業規模の大きな企業に所属し、社会的・経済的に比較的恵まれた層に偏っている可能性がある。したがって、日本のサラリーマン全体の生きがい意識を偏りなく検討するためには、厚生年金基金に加入していない層・受給していない層、あるいは企業規模が小さい企業に所属し、社会・経済的に比較的恵まれていないとみられる層にも調査を拡大し検討してみる必要がある。

**謝辞** 本論文は、シニアプラン(2003)の調査報告書の一部に加筆修正したものである。「サラリーマンの生きがい調査」に参加させていただくとともに、今回、データの追加分析の機会を与えていただいた財団法人シニアプラン開発機構に心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- 東清和 1999 『エイジングと生きがい』 東清和(編) 『エイジングの心理学』早稲田大学出版部 pp.131-168.
- 古谷野巨 2003 『サクセスフル・エイジング』 古谷野巨・安藤孝敏(編著)「新社会老年学」pp.141-163.
- 古谷野巨 1981 生きがいの測定 - 改定PGCモラール・スケールの分析 老年社会科学 3:33-95.
- Larson, R. 1978 Thirty years of research on the subjective well-being of older Americans. *Journal of Gerontology*, 33:109-125.
- Lawton, M. P. 1975 The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: A reversion. *Journal of Gerontology*, 30:85-89.
- Neugarten, B. L., Havighurst, R. J., & Tobin, S. S. 1961 The measurement of life satisfaction. *Journal of Gerontology*, 16:134-143.

- 西村純一 2005a サラリーマンの生きがいの構造, 年齢差および性差の検討 東京家政大学紀要 第45集(1), pp.209-214.
- 西村純一 2005b サラリーマンの生きがい対象の構造, 年齢差および性差の検討 応用社会学研究 No.47, 143-148.
- シニアプラン開発機構 1992 第1回 サラリーマンの生活と生きがいに関する調査: サラリーマンシニアを中心にして.
- シニアプラン開発機構 1993a 第1回 サラリーマンの生活と生きがいに関する調査: 第2次調査.
- シニアプラン開発機構 1993b 生きがいに関する研究会 最終報告書-サラリーマンシニアの生きがい創造に向けて.
- シニアプラン開発機構 1997 第2回 サラリーマンの生活と生きがいに関する調査: サラリーマンシニアを中心にして.
- シニアプラン開発機構 2002 第3回 サラリーマンの生活と生きがいに関する調査: サラリーマンシニアを中心にして.
- シニアプラン開発機構 2003 「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」のフォローアップ調査.
- 杉山善朗・竹川忠男・中村治・佐藤豪・浦沢喜一・佐藤保則・斉藤桂紀・尾谷正孝 1981 老人の「生きがい」意識の測定尺度としての日本版PGMの作成(1) - 尺度の信頼性および因子的妥当性への検討 - 老年社会科学, 3:57-69.

### Abstract

In this study, we analyzed data from a postal survey concerning the purpose in life carried out by the Senior Plan Development Organization in 2001 on 4505 participants in the Welfare Pension Fund between 35 and 74 years old in order to examine awareness concerning whether or not Japanese salaried workers have a purpose in life and the factors which prescribe it. Two scales concerning perception of a purpose in life extracted by Nishimura (2005 a) from the same data and two scales concerning perception which was the subject of a purpose in life extracted by Nishimura (2005 b) were used for the analysis.

The results of the analysis of the relationship between the four scales concerning perception of the purpose in life and awareness concerning whether or not they have a purpose in life showed the following.

1) People who say, "I used to have a purpose in life, but I now have no purpose in life" tend to seek stability in life. 2) People who "have a purpose in life now" tend to seek a feeling of growth as a human being, while people who say, "I don't know whether or not I have a purpose in life" tend to seek stability of mind. 3) People who "have a purpose in life now" tend to select a life having social responsibility as their subject of the purpose in life, while people who say, "I used to have a purpose in life, but I now have no purpose in life" tend to be have a carefree life as their subject of the purpose in life. 4) People who say, "I don't know whether or not I have a purpose in life" and people who "have no purpose in life now" seek a sense of emotional fulfillment, while people who "have a purpose in life now" and people who say, "I used to have a purpose in life, but I now have no purpose in life" tend to select the creation of health in mind and body.

The results of the analysis of the determinants of whether or not one has a purpose in life show the effects of variables such as "I always step forward to a goal", "I have a superior point which others do not have", "I find a quite enjoyable thing anywhere", "A dialogue between husband and wife", "the degree of satisfaction of the present job", "how old one is", etc. The achievement motives, satisfaction of one's job, and frequency of a dialogue between husband and wife were indicated as especially important factors in having a purpose in life.

**Key words** : loss of the purpose in life, Japanese salaried workers, and determinants